

グローバル人材育成withコロナ

～長崎大学経済学部の取組みのこれまでとこれから～

長崎大学経済学部国際ビジネス教育研究センター

原 由紀恵 Ph.D. (言語学)



2013年 4月 お茶の水女子大学グローバル人材育成推進センター(ー2017年3月)

2014年 8月 ハワイ大学マノア校言語学研究科博士課程 修了(Ph.D.)

2017年 4月 南山大学国際センター(ー2019年3月)

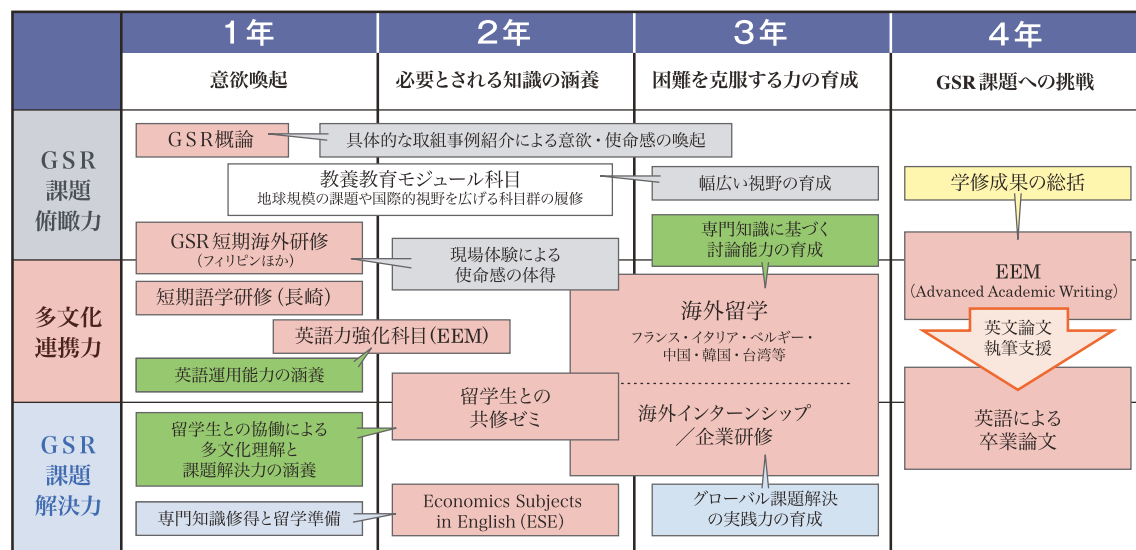
2019年 4月 現職

「国を超えて多くの人と関わることができた」—
これは2019年に発生した新型コロナウイルス
(COVID-19)のパンデミック下でありながら長崎
大学経済学部国際ビジネス(plus)プログラムに
参加する学生が発した言葉です。新型コロナウイ
ルス流行による世界的変化は国内外の経済に影
響を及ぼし、人々の移動に制約を課しながら、
withコロナの新たな形を私達に問いかけていま
す。このレポートでは、長崎大学経済学部でグ
ローバル人材育成の取組みとして2014年から続く
「国際ビジネス(plus)プログラム(International
business(plus)program)」に於ける教育活動
を例として、コロナ禍に於ける新たな道筋の可能
性と展望をお話ししていきます。

■GSRマインドで活躍する人材の育成 を目指して: 国際ビジネス(plus) プログラム

まずはプログラムをご紹介します。グローバル
人材—多様な文化や歴史的背景を理解しながら
各々の利害対立を乗り越えて地球規模の諸課
題の解決を目指す「志」、すなわちグローバル・
ソーシャル・レスポンシビリティ(GSR)マインドを持
ち、英語による高いコミュニケーション能力や経済
学・経営学の専門知識を活用して解決策を見出
すことのできるグローバル人材—の育成を目指し
て、文科省による「グローバル人材育成推進事業
(特色型)プログラム」への採択を機に2014年、
長崎大学経済学部で創設されたのが国際ビジネ
ス(plus)プログラムです。多文化共生が認識さ

\ 国際ビジネスプログラム関連科目 /



EEM: English for Economics Majorsの略
海外留学は2年次後期から行くこともあります。

『長崎大学経済学部国際ビジネスプログラム』パンフレットより

れる今日において、地球規模の課題への意識や（昨今ではSDGsなど）多様性への理解が豊かな人材が求められています。

プログラムの構成は、学生が地球規模の課題に取り組み、広い視野を持ってその解決策を企業や社会において活かす国内外にて活躍することが期待できるように組まれています（上図）。協働や相互理解に必要な英語活用能力の向上、GSR関連科目や英語による経済学等の講義と留学生との共修、留学（短・長期）、の三つに特徴付けられるでしょう。短期語学研修にて、失敗や間違いを恐れずに英語を使うことに慣れることを動機づけられた一年生は、留学時まで英語でのディスカッションやプレゼンテーション等、コミュニケーション力を養成していき、英語で卒業論文が作成できる程度まで高めていきます。フレンドリーな雰囲気の中で発言を促された学生は、意見交換を重ね、グローバル人材として必要な積極性や

協調性が同時に涵養されていきます。国際様式を知ることも大切であり、例えば起承転結は日本式ですが英語では異なる等、多様な講義を通じて国際リテラシーをも身に付けていきます。GSR関連科目や留学生との共修ゼミでは、異文化や多様性を理解する重要性を肌で感じ、理解する能力を高めていきます。本プログラムではまた短期海外研修を交換留学の準備段階として位置づけ、学生は海外での経験をより多く積むことになります。一年次後期にはGSR短期海外研修への参加により、地球規模の課題に取り組む事業に関する講義や企業見学を内容とする本研修参加を行い、グローバルな視野を広げ英語によるコミュニケーション能力の必要性を理解した後、海外協定大学に欧米とアジアを中心に半年から一年程度の派遣する交換留学へ臨んで、海外の大学で経済及び経営等を現地の学生と共に学びます。海外の大学での講義単位を取得する

ことは容易ではありませんが、学生達は複数の単位を取得し帰国します。現地学生との交流を通じて学ぶことは多く、本学部卒業後にも有益な人的ネットワークが構築されるようです。奨学金等のサポートのしくみと実績も長く、渡航費用の負担等経済的理由により学生が留学を断念する必要がないよう海外研修の機会を提供するべく、本プログラムの海外派遣では日本学生支援機構海外留学支援制度、長崎大学海外留学奨学金制度等が学生を支えてきました。交換留学派遣者数は2014年から2019年の六年間で二倍以上増加しています。

長崎大学経済学部における海外受入(外国人留学生)も年間40~50名程度で安定的に推移してきました。そのような中でグローバル力が身に付くしくみは講義外の日常にも広がっています。例えば、学生は外国人留学生のチューターとなって留学生の学習面、生活面を援助するとともに交流を推進します。また経済学部ではイングリッシュサポートルームを設置しており、昼休みに English Caféを開設することで、留学生と国際ビジネスプログラム生同士が気兼ねない交流の時間を楽しみ、縦と横の繋がりが形成され、情報交換や精神的繋がりを大切にグローバル力を日



毎年20~30名程度の意欲あるプログラム生が誕生する(短期語学研修にて)



英語ディスカッションの様子

国名	大学名	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20
中国	上海財経大学				1			
	西南財経大学				1	2		
台湾	国立東華大学				3	1	1	
	国立台湾大学	2	2	5	1	1	4	
	淡江大学	1						
韓国	中央大学校		1	3	3	1		
	成均館大学校			1				
タイ	チェンマイ大学	2				5		
イタリア	カ・フォスカリ大学		4				3	
	トレント大学			2	2	2	2	
ベルギー	グント大学		1	1	1	1	1	
	モンス大学						2	
フランス	ヨーロッパ・ビジネス・スクール パリ校	2	1		2	3	3	
ポーランド	ワルシャワ経済大学				2		3	

経済学部からの海外派遣(交換留学生)

常に育んでいきます。プログラムに所属する上級生は留学説明会やプログラムのイベントにも積極的に力を貸してくれる頼もしい存在です。

■withコロナ: コロナ禍がもたらしたアップデートとこれからのグローバル人材育成

こうした中で2019年度、コロナ禍を経験することになります。学生の海外受入、派遣が共にストップし、世界各地が同時に同様の状況に見舞われ、就学そして就職に渡るまで、学生の今と将来に甚大な不安の影を投げかけました。その中で、長崎大学 河野茂学長の言葉がありました—柔軟にこの現実を受け入れましょう。そして、この困難をしなやかに生き抜いてみせましょう—(学長室ホームページより)。困難な状況はチャンスであると捉えることが可能です。どのような状況にあっても柔軟に適応し成長していく力、つまりレジリエンスを成長させるチャンスでもあり、学生の情報通信技術やリテラシーが向上する好機であり、物理的な移動に制約があるからこそ、コロナ禍を契機に、さらなる多様な国内外大学との交流を進める流れを経済学部に生み出しました。

長崎大学では2020年度前期から既にオンライン講義が原則となりましたが、国際ビジネスプログラムでは多様に、Zoom、Padlet、Google Classroom、長崎大学LACS (Learning Assessment & Communication System) 等のオンラインミーティングやファイル共有ソフトを多用して、遠隔でのグループディスカッション等のオンラインによるリアルタイム講義を大切にしてい

ます。対面と同程度の講義ということに加えて、挙手や質問がチャットでしやすくなるなど、利点が多いことも実感されています。本プログラムでは英語によるプレゼンテーション・エッセイ指導の充実が顕著である他、オンライン講義を多く活用していることにより受講生の情報リテラシーがかなり向上しているとの報告が上げられています。こうしたツールの利用技術向上やマナーはこれからの国際市民に必要な力であり、学生は日常的に活用して久しくなりました。English Caféもオンラインにより実施するほか、プログラムのとある上級生が率先して、学生(とくに下級生)が交友の機会を持てるよう企画を教員に打診してくれました。プログラム生の頼もしさを感じた一コマです。

GSR短期海外研修はGSR力を養う機会であり、交換留学に備えた動機づけの役割も担いますが、派遣予定のフィリピン大学と国立東華大学(台湾)は噴火と新型コロナウイルスにより、断念を余儀なくされました。しかしこれが新たな扉を開くこととなります。GSR短期海外研修(オンライン)として、ウーロンゴン大学(オーストラリア)に於ける留学に学生は参加し、国外の学生とSDGsについて英語で共に学びました。このことは、現地型の留学と比較して、より多様な地域、文化、バックグラウンドを持つ学生との交流の機会を広げうことを示しています。参加学生の感想をひとつご紹介します。

GSR短期海外研修(オンライン)

オーストラリア・ウーロンゴン大学

2021年3月 伊勢 万里子さん

2021年2月22日から3月5日までの間、国際ビジネス+プログラムの6期生がオーストラリアのウーロンゴン大学のオンライン留学に参加しました。オンライン留学では、午前中は各クラスに分かれて英語の授業が行われ、午後はSDGsのプロジェクトが行われました。

英語の授業は、1クラス約15人程度で、多くの日本人の学生が参加していました。授業は毎回ディスカッションを行い、発言を求められる機会が多かったです。はじめは本当に大変でしたが、クラスのメンバーや先生が良い雰囲気を作ってくれていたおかげで、ミスを恐れずに話すことができました。日頃の授業とは異なり、何時間も英語を使うので1日目は相当疲れました。正直、はじめは英語を話すことを恐れ、相手の英語を聞き取ることができるのか不安で、どうして参加したのだろうと思いました。しかし、毎日授業を受けていくにつれて、話すことへの抵抗がなくなり、コミュニケーションが取れた時に幸せを感じるこの方が大きくなっていました。

午後のチームミーティングでは、5,6人のメンバーに分かれ話し合いの中で、SDGsの課題と解決策を導くことをしました。そして、最終日には全員の前でプレゼンテーションを行ないました。私の班は日本人2人、韓国人1人、オーストラリア人1人の4人でした。少ないメンバーであったため、自分が英語を話す機会が多く、とても大変でした。また考える内容も難しかったです。このチームミーティングを通して思ったことは、最初は緊張するけれど、しっかりと意思疎通ができていると楽しくて、自分の意見を相手に理解してもらえると英語を話すことが苦にならないことです。

国を越えて多くの人と関わることができた10日間は本当に充実していました。初めての経験であり、戸惑うこともありましたが、とても楽しかったです。私もまだまだ勉強中ですが、英語を話せるようになるには、英語で話すことを恐れず、積極的に会話する、英語を話すことだと思いました。このオンライン留学を通して身をもって感じました。

『長崎大学経済学部国際ビジネスプログラム』パンフレットより

こうしたことが、これまでの派遣・受入の実績ある協定校に加えて、国内外に更なるパートナーシップを広げる原動力となり、ヴァーチャルでの授業の共有(COIL)の開発に繋がりました。

2021年夏、マケドニア随一のスコピエ大学の

経済学部学生と国際ビジネスプログラムの学生の交流実現はその一例です。長崎大学経済学部 西村宣彦教授がJICA(国際協力機構)の要請によって行ったマケドニアの小規模事業者に対する集中講義の縁を活かして、現地学生との

ディスカッションを中心としたオンラインセッションが実現することとなりました。双方の国の文化や経済を学生同士が教え合うワークショップ型の講義に学生達が参加します。

長崎大学経済学部と桃山学院大学国際センター（大阪府和泉市）の学術交流協定締結（2021年5月）はさらなる一例です。グローバルや内なる国際化という観点から、身近にあるエスニックタウンへのフィールドワーク、多文化化する日本社会の現状および長崎や大阪を中心とした地域の特色について考察することを通じて、オンラインという環境を活かし、今秋、長崎大学と桃山学院大学の学生チームが多文化共生や異文化理解に関する背景や課題について、共修講義で学びます。

地球規模で物事を考え、長崎を知り、積極的に情報データを活用し学び続けること―。長崎大学長が今年度新入生に送ったこの提案のように、学生が困難を乗り越え時代に即してしなやかに生き抜けるように、サポートもしなやかに対応していきます。

■さいごに

2019年に発生したCOVID-19による影響は、長崎大学の学生達やこれからのグローバル人材としての在り方、その育成取組の在り方にチャレンジを提示しました。海外派遣、受入が従来のように可能ではない状況が続いていますが、このように中でどう取り組んでいけるか、その在り方に、これからのグローバル人材の在り方や、個性、強さ、そして豊かさを築き見出していくことができま

す。グローバル人材育成を目指して、諸外国及び国内の大学との連携を通じて学生の柔軟な学びや多様な能力を獲得できるように―グローバルや内なる国際化という観点を含めてプログラムを進めていきます。学生は地域の人々や地域の企業のニーズを認識すると同時に広い視点から物事を考えられるような柔軟性を獲得することが期待されています。学生達はレジリエンスを高め、これからの将来に必要な力を開拓し、身に付け、現在たくましく取り組んでいます。これらの経験を積むことで、時代のニーズに応えられる人材として県内外、国内外の架け橋となり活躍できる。withコロナにあって、長崎大学経済学部はこれからの時代に即したグローバル人材を育成し学生をサポートしていきますので、今後とも宜しく願い申し上げます。